

・かの青い天を振り仰いで我が身の不運を訴える。

この作品については筆者は既に注釈を試みたものを公にした。⁽¹⁸⁾ その考察の中で本論と関わりのある一文を以下に再度引用してみる。

現時点では推測の域を出ないのだが、『菅家後集』の作品の配列には、道真自身の深い配慮と意図が込められていてと考えている。単なる制作順の配列ではなく、『菅家後集』を編集するにあたり、表に出ていない多くの作品の取捨選択を施した後、とりわけ巻頭の詩「476自詠」と巻末の「514謫居春雪」の配列には道真の万感の念を込めた意図的なそれがなされており、「476自詠」と「514謫居春雪」の詩情が見事に呼応するように熟慮された上での漢詩集になっていることを、これから『菅家後集』の全作品の注釈を通して実証してみたいと考えている。⁽¹⁹⁾

と述べた。さらに、菅野氏の「476自詠」の詩の考察をなされた論文の、次のような一文を引用した。⁽²⁰⁾

「道真の感傷は個人的悲哀にとどまるものではなかったのである。それは、個人や私を超えて、より広く社会や国家の現状と将来がこれだよいかという憤激を、底にたたえていたものではなかったろうか。」

「道真は、配所での悲哀、屈辱、孤独などに対して、自らを暗に屈原に比することで身の潔白を主張し、また慰めを得ていたのかもしれない」（五三三頁）